

水木さん妖怪が神様に

悼む県内関係者「笑顔忘れられず」

戦地での体験を原点に人間の人もつながりを持ち、強う姿が印象的だった。上高井の本質やユーモラスな妖怪をい印象を残していた。「ひょうひょうとひょうつ、描き、30日に亡くなった漫画家水木しげるさんは、長野県興味のあることをとことん追



グルに3年間滞在した経験が縁となり、1994年に水木さんの回国旅行に同行した。先住民の精霊信仰に興味があった水木さんの希望で、旅行は約1週間。水木さんはシ



ヤングルや先住民の暮らしを熱心に撮影したといい、北村さんは「好きな物を追っているときの真剣な顔と、時折見せる笑顔が忘れられない」と言う。

堀内さん(右側の店の前で記念撮影に際した水木さん(中央))
2003年11月ごろ、小布施町

は「本当に驚いた。水木さんとの出会いは、好奇心と探求心の大切さを教えてくれた」と語った。

念撮影に応じてくれた。同日は30日、鬼太郎の人物の腕に喪章を付けて水木さんをしのんだ。

「唯一無二の指標」 「優しさにあふれ」

次く相むし借

水木しげるさんの訃報に各界の関係者から惜しむ声が相次いだ。

哲学者の梅原猛彦さん(90)は2010年に水木さんと対談した。「二度きりの出会いだったが、友情を感じた」。神話や妖怪の話などで盛り上がったという。「総員玉砕せよ!」など一連の戦記物は「大岡昇平の『野火』に続く名作。現代を代表する芸術家の一人だった」と評価した。

「漫画家になれたのは、水木先生のおかげ」と語るのは「釣りキチ三平」の作者漫画家矢口高雄さん(76)。1969年、出版社に原稿を持ち込もうと秋田県から上京した矢口さんは、編集者の反応から諦めていた時に「大丈夫だよ」と励まされたという。「人間を冷静に見ていたが、その半面、優しさにあふれるところ

「唯一無二の偉大な指標を失い、言葉もありません」。作家の京極夏彦さん(68)は妖怪好きでもあり、執筆で多忙な中、「水木しげるの漫画大全集」

を営む川瀬仁さん(48)は、鳥取県の境港岡工業専門学校が主催する「境港妖怪検定」の上級合格者。妖怪好きが集まる「世界妖怪会議」にも3回参加し、水木さんに戦身体験や妖怪の話聞いた。「水木先生自身が妖怪という感じ。寂しい。神様になってしまいましたね」と悼んだ。

もあった。あらためてお礼を言いたい」と別れを惜しんだ。イラストレーター南坊坊さん(68)は「中学の時に資本で読んだ『河童の三平』が印象的だった。子ども向けだからといって手加減する人ではないと感じた」と話した。

水木プロダクションは30日、水木しげるさんの死因を訂正し、多臓器不全と発表した。死日時は30日午前7時18分、葬儀は近親者で行い、後日、お別れの会を開く。喪主は妻の武良布枝(むら・ぬのえ)さん。